

【 楽しいだけがテレビじゃない 】

社会マスメディア系専攻 教授
横山隆晴

t.yokoyama@socio.kindai.ac.jp

元フジテレビ・ゼネラルプロデューサー。
報道・社会部記者。ドキュメンタリー
ディレクター、プロデューサー。

◆研究テーマ

① テレビ・ジャーナリズム研究

世界の報道の自由と言論の自由を守るため、1985年にパリで設立された世界のジャーナリストによるNGO『国境なき記者団』が発表している「世界報道の自由度ランキング」で、180カ国、日本は、2015年に61位、そして2016年は72位にまで、その順位を下げた。ここ最近の急激な下落が世界の注目を集めている。

激変する時代の大きなターニング・ポイントの渦中であって、日本のメディアは果たして、世の中で起こっている事象・事実を正しく報道しているのかどうか。日本のテレビ・ジャーナリズムは果たして正しく機能しているのかどうか。もしそれが充分でないとするなら、その理由はどこにあるのか。その原因はどこに潜んでいるのか。

ジャーナリズムの本来的な意義を基軸に据えて、メディア（テレビ・ジャーナリズム）の信頼性と可能性について多角的な考察を展開。

② ドキュメンタリー研究

ドキュメンタリーは、今や“風前の灯”、かもしれない。幾つかのテレビ局が、深夜の時間帯に、かろうじて細々と放送を行い、その息を数少ない制作者たちが途絶させないようにしているかのようにも見える。

ドキュメンタリーは、視聴者に「負荷」を強いる。「負荷」を言い換えれば、「考える」、ことを要求してくる。ちょっと「面倒な」ジャンルなのだろうと思う。

メディアは時代とリンクしている。とりわけテレビは、その時代の「合わせ鏡」。テレビが時代を映し、時代がテレビを映す。

1980年、『楽しくなければテレビじゃない』、という一つのキャッチコピーが、それまでの“伝統的な”テレビの方向性を根本的に変えた。フジテレビが打ち出した自社の為の戦略的な企業コピーに過ぎなかったこの短いキャッチコピーが、その瞬間、テレビメディア全体の流れを大きく変えてしまった。想像を超えた革命的とも言えるような出来事だった。私はその“現場”を実体験している。『楽しくなければ———』のフレーズは、フジテレビという単なる一企業の宣伝コピーを超えて、1980年代の日本社会全体の雰囲気醸成へと一気に広がっていった。時代状況は、高度経済成長のマックス付近。人々は浮かれ、騒ぎ、歌い、踊っていた。『楽しくなければ———』のフレーズが日本列島を包んだ。時代（人々）のキャ

ッチコピーは……、『楽しくなければ、人生じゃない』。その時からフジテレビの快進撃が始まる。テレビが時代を映し、時代がテレビを映す。テレビと時代は相俟って、「面倒な」ことを「考える」という、焦土から出発して戦後の困難な時代を生きてきたそれまでの懸命な日本人の在り方を大きく変えてしまった。

時代（人々）が「面倒な」ことについて「考える」ことを減退させていけば、ドキュメンタリーが時代（人々）から減衰していくのは必定の理となる。そして今、テレビは傾いている。日本という国が傾いているのと符合するように。1980年から始まった『楽しくなければ———』のフレーズが、あれから35年以上が経った今も、基本的には変わることなく現在のテレビに息づき、それが続いている。『楽しくなければ———』の時代は、とうに過ぎ去っているというのに。

何事も、活路は時に、少数派の中に隠されている。“風前の灯”にこそ、消してはならない大切な「思い」が潜んでいるのかもしれない…とは考えられないだろうか。

必然的にゴールデンタイムでの放送枠から外れていったドキュメンタリー。しかし、多くの人の観ていない、静かで目立つことのないドキュメンタリーに今、もしかしたら若い人たちの人生を決定づけ得るようなヒントがある。かもしれない。

ドキュメンタリーは、硬い、暗い、難しい、面倒、面白くない……って？ 本当に、そうかな？ 『楽しいだけがテレビじゃない』———。美学がある。

◆作品・受賞等

<報道・社会部記者>

「リクルート事件」／「昭和天皇崩御」
「宮崎勤幼女連続誘拐殺害事件」など

<ドキュメンタリー（レギュラー番組）>

「今夜は好奇心」「ワーズワースの庭」
「ザ・ノンフィクション」「NONFIX」

<ドキュメンタリー（海外取材番組）>

「南アメリカ」「フランス」「マレーシア」
「西サモア」「インド」「オーストラリア」
「東アフリカ」「西アフリカ」「フィジー」
「タイ」「韓国」「トルコ」「中国」など

<ドキュメンタリー>

『白線流し～4年後の早春賦～』
『東京春浪漫』『ゆっぴいのばんそうこう』
『春想い～初めての収穫ぎ～』
『小さな留学生』『若者たち』『私の太陽』
『ドキュメンタリー北の国から』
『ドキュメンタリー中国からの贈りもの』
『桜の花の咲く頃に』
『泣きながら生きて』
『私たちの時代』 など

ギャラクシー賞・選奨

日本民間放送連盟賞・最優秀賞

日本放送文化大賞・グランプリ

JPPA賞・グランプリ

アジア・テレビ・アワード・優秀賞

放送文化基金賞<放送文化>個人賞 など

◆「横山ゼミ」卒業生

テレビ、新聞、出版、一般企業、公務員